



テーマ: I 基本の復習(正教会聖歌の伝統と基本概念)

II 正教会聖歌の聖神^o 性と音楽性

テーマ: I 基本の復習(正教会聖歌の伝統と基本概念)

I - (1) 正教会聖歌の伝統

古い伝統を持つ私たちの正教会においては、教会建築とイコンと聖歌の関連性ということがよく言われる。なぜ、この三つの芸術に関連性が見られるのか。それはこの三つが、役割において一つの大きな共通点を持っているということと無関係ではない。その役割とは、これらの芸術が個人的な喜怒哀楽や情感を表現することよりも、バガスルジェーニエ奉神礼(богослужение)という祈りの場に奉仕することを優先するという点にある。ここから、聖歌においては、その音楽様式が表現方法においても、形式においても自ずと定まってくる。

例えば世俗の音楽の場合、古典音楽の後、様々なジャンルが試みられ、ミュージカルやポップスなどの分野が現れたのに対し、正教会聖歌においては、このような方面での様式の模索は無縁のものだった。また、キリスト教世界の中においても、新教(プロテスタント)が、民謡等世俗の唱歌のメロディーを讃美歌に取り入れるようになってからも、正教会聖歌においては「厳格な教会様式」(ストローギー ツェルコーヴヌイ スチーリстрогий церковный стиль)が一貫して守られてきた。

聖師父たちは、次のように言っている。

教会音楽理論の基礎を作ったといわれるアレクサンドリヤの主教クリメント(†217):「(教会)音楽は祈りの気持ちに磨きをかけ、祈りの気持ちを育てていくものでなくてはならない。極端に情緒に訴え、感情を不安定にする音楽(悲しい気分させたかと思うと、つぎには熱狂的な激しい感情を呼び起こすようなもの)は排除されなければならない」。

聖大ワシリー(†379):「聖神^oは、人間を善行に導くのが難しいことを知っているので、善行に向かうことにおいて怠惰な人間を正しい道に導くために、教えの言葉を歌に載せて、聴覚の心地よい刺激を通して吸収できるようにした。その心地良い音楽とともに、そこに歌われている有益な言葉が、我々の霊を教育してくれるために」。

I - (2) 正教会聖歌の基本概念

イコン画家の目的が、ファヴォル山における主の顕栄の輝きを表すことであるとすれば、聖歌者の目的は、天の宝座の前で神を讃栄している神使の歌声を表すことである。これが、聖歌の基本概念となる。

「神使のごとき歌」の重要な要素は、「神の恩寵に満ち、聖神^o性高く、神使のような響きを持つこと」であり、その目的は、霊を神の世界との調和へ導くことである。

I - (3) 正教会聖歌の伝統継承

正教会聖歌のあるべき姿を知り、また正教会聖歌の伝統を正しく受け継いでいくために、聖歌の伝統や歴史を学ぶことは不可欠である。聖歌研究の第一人者の一人、I. A. ガードナーはこの点について次のように述べている。

「日頃、私たちの歌っている聖歌をより深く理解するためには、聖歌をその今日ある姿においてのみ知るのではなく、1,000年にわたる歴史を可能な範囲で知ることが必要である。即ち私たちの聖歌が今日までに辿ってきた道を知ることである。なぜならば、これを知ることにより初めて私たちは、現在の聖歌を真に正教の奉神礼のための聖歌であるべく守ることができるのである。聖歌は、過去との繋がりを断絶して理解されてはならない。過去の伝統を守り、しかも今日の聖歌として生きていなければならない。その際に重要なことは、聖歌の本質から決して外れないこと、即ち時代の流行や芸術的な美しさや個人的な趣味に流されず、奉神礼のための聖歌のあるべき姿を守ることである。」(『ロシア正教会聖歌の歴史』I.A. ガードナー著の序文より要約翻訳)

聖歌を歌うためになぜ聖歌史の知識が必要かと思われる向きもあるかと思う。しかし、現実今日、キリスト教諸派の中でも、伝統的な「聖歌」を護っているのが正教会だけであること、また正教会聖歌にしても、もしその伝統が正しく受け継がれ、認識されなければ次第に聖歌とは異なるものになっていく可能性があるということを思うと、聖歌に携わる者にとって上記のガードナーの指摘がとても重要であることが解るであろう。



▲ 明治期の函館ハリストス正教会



▲「クリロスのイコン」
(聖歌隊庇護のイコン)

※「クリロスのイコン」の説明:^{クリロス}「клирос」とは、升壇の右左の端の部分言い、元来、聖歌隊(右詠と左詠)が立つ場所。オモフォルを広げている生神女の左側がダマスクの聖イオアン(8世紀の聖師父で『八調経』を編纂・確立した人)、右側が聖歌者聖ロマン・スラトカペヴェツ(6世紀の聖人で、降誕祭のコンダクを始め、優れた聖歌をたくさん遺している)。下で歌っている聖歌隊の前中央に居る役

割の人を^{ガラフシーク}「головщик」(「声でリードする人」の意味)と言^{レーгент}う。「регент」が「聖歌指揮者」として大規模な聖歌隊で混声四部など音楽的に難度の高い作品を扱うのに対し、小規模な聖歌隊でオビホードを中心とするレパートリーの聖歌を行う場合に、聖歌者と一緒に歌いながら聖歌隊を^{ガラフシーク}リードするのが「головщик」。(日本の聖歌隊では、「レーгент」という言葉のほうが知られているが、現実には鑑みると、多くの教会が必要としているのは「ガラフシーク」の方である)。

聖歌者の並び方に注意してみると、ガラフシークは聖歌隊全体の中央前の位置に立っており、また聖歌隊と対面するのではなく、聖歌隊と一緒に前を向いていることがわかる。小規模の聖歌隊の場合は、この並びの方が声をまとめ易い。また、リードする人が至聖所に背中を向けていないので、聖歌隊全体がご祈祷の流れに沿う姿勢(雰囲気)を醸し出すことができる。また、聖歌者は、「横一列に並ぶのではなく、弧を描くように丸くまとまっていることにも留意したい。お互いの声が聞き易く、ハーモニーを作り易い体制になっている。

(ロシアではプロフェッショナルな大規模聖歌隊がバルコニーで歌う場合は、バルコニーに雛壇のような階段を設けて横並びになる場合が多い)。

また、描かれている9名の聖歌者に対して、アナロイが一つである。一つのアナロイの前に一人か二人が立ったとき、その左、右、後の人には楽譜が見えないような立ち方をしないように気を配ることも大切。

テーマ： II 正教会聖歌の聖神^o性と音楽性

今回のテーマでは、「正教会聖歌」において「音楽性」とは何か、ということについて考えてみたい。

今まで聖歌研修会の講義では「正教会聖歌」の主に「聖神^o性」について聖師父の教えに基づいて「正教会聖歌のあるべき姿」について学んできた。実は、その教えの中に聖歌における「音楽性」とはどのようなものであるか、という課題は既に包括されている、ということに気づいている方々も多いと思うが、今回は「聖歌における音楽性」という課題について考える時に大変参考になる教えを二つ引用してみた。

[1]モスクワ及び全ロシアの総主教アレクシイ I 聖下の講義より要約引用

1948年4月18日、モスクワ神学アカデミーにおける講義

正教会の神品各位にとって重要な課題の一つとして疎かにできないものの中に、「正教会の聖堂における正しい聖歌の在り方」という課題がある。神の宮であり、祈りの家である聖堂においては、全て(イコン、誦経、聖歌、聖堂の外観、内観)が祈りの気持ちを呼び起こし、これを支え、信仰を堅固にするものでなければならない。聖堂においては全てが敬虔であり、高揚した霊的な美しさを醸し出し、霊を鎮め、霊を教導するものでなければならない。

このことは、特に聖歌について言える。なぜならば、聖歌は聖堂内において参拝者の霊に直接影響を与える最たるものの一つであるからだ。聖歌を構成しているものは祈りである。神の宝座の前における第一の聖歌者——それは諸神使であり、諸聖人である。彼等は昼も夜も絶え間なく、創造主である全能の神を讃美している。この諸神使と諸聖人に倣い、地上の教会は奉神礼において聖歌を行うことを定めた(「今天軍我等と偕に、見えずして勤めをなす」)。そして聖歌が伴わない奉神礼は無い。

このように聖歌は正教会奉神礼において崇高な使命を担っているものであり、古代においては当時のハリスチアニンの信仰生活も実際そのようであったのである。当時は「ハリスチアニン」とは、「聖人」と同義であった。まただからこそ当時の聖師父が遺した祈り文は今もって永遠の模範・理想として正教会に伝わっているのである。現在私たちが受け継いでいる聖歌も彼らから受けた豊かな財産である。

古代の聖歌の調べが深い聖神^o性を表現するために最も適していたのは言うまでもない。なぜならば、その調べを作った人々の聖神^o性がそれだけ深いものだったからである。彼等諸偉業者、諸聖人の豊かな才能とは、秘められた天の霊的な音を聞くことができる才能であった。それはロシアに正教がもたらされてからもロシアの多くの修道院において受け継がれ、「真の聖歌」を聴き、心を慰めることができた。

残念なことに、今日この「真の聖歌」の伝統は殆ど失われかけている。厳密な教会様式にのっとり「天の霊的な音」に代わり、私たちの耳に飛び込んでくるのは、世俗化された軽率な音である。このような「歌」は、聖歌本来の使命を果すことができず、聖堂は「祈りの家」ではなく「無料コンサートホール」にとって代わりつつある。「参拝者」が祈りの気持ちを損なう「歌」を聴きながら仕方なく忍耐している姿の隣に、コンサート感覚で「歌」を聴きに來ている「聴衆」の姿がある。

このような「聴衆」の評判を得ようと、諸聖堂のレーゲントたちはより「聴き応え」のある難度の高い作品をあさり、その練習に時間を費やすことで、凌ぎをけずっている。この「間違った意味で聴き応えのある歌」においては、音楽効果のために祈り文が犠牲になり変形されていることも少なくない。

さらに残念なことは、このような難度の高い楽譜に執着して時間をとられ、本来の日々の祈り文において重要な八調で歌うステヒラを練習する時間がなくなり、結果として最も祈り文において意味の込められた部分は、口がまわらず、発音不明瞭なままそそくさと流される。

このような状況を前にして、私たちは諸聖堂における聖歌の在り方に対して細心の注意を払わなければならない。聖歌が本来の聖歌の使命を無視している今日の状況を無視する権利は私たちには無い。祈る者の心に最も沁みる本来の聖歌に立ち戻るために、今日の聖歌に万延している世俗化傾向を払拭しなければならない。

[2] 聖アヴグスチン著『告白』より、音楽の快楽と危険について

…清らかな声で妙なることこの上ない節回しの歌が歌われる時、歌そのものではなく、歌の内容にとってどんなに心を動かされるかを思えば、この[高らかに歌うという]習慣がいかに大切かをあらためて思い知るのです。このように私は危険な快楽と健全な経験とのあいだをさまよっています。どちらかと言えば私は(決定的な見解ではありませんが)、教会で歌を歌う習慣を認めたいと思います。それは耳の楽しみを通じて、弱い者の心を敬虔の念に目覚めさせるためです。しかし、歌われる内容よりも歌そのものによって一層心が動かされるようなことがあれば、そのとき私は許しがたい罪を犯しているのです。私はそう告白します。そしてそれぐらいなら、むしろ歌を聞かないほうが良いのだと思います。見て下さい。これが今の私の有様です。心の内で少しでも善なることを求め、それを実行に移す人は、私とともに泣いて下さい。そして私のために泣いて下さい。もっとも、善なることを心に掛けない人にとっては、こんなことはどうでもよいことでしょう。しかし主であり私の神であるあなたよ、私の言葉に耳を貸し、私を顧み、私をご覧になり、私を憐れみ、私を癒してください。…

(グラウト／パリスカ 新西洋音楽史 (上) 音楽之友社 2002年)

(※イッポンの主教聖アヴグスチン。353－430。4世紀の優れた神学者。聖師父。)

聖金ロイオアンは「私たち自身が、神・聖神^o の笛となり、キタラ(当時の弦楽器)となろう。楽器を調律するように、神・聖神^o によって自分の霊を調律しよう」と言っている。ここで大切なキーワードは「霊の調律」である。私たちは、音叉によって絶対音の「c」(又は「a」)を得て、正しい調に乗ることができる。同じことが祈りについても言える。正しく主・神の声を聞くためには、その声と同じ周波数で反響する霊を自分の内に調律しておかなければならない。

聖歌者の為すべきことは、「教会の奉神礼や規則を単なる儀式として理解し、形だけを模倣するのではなく、自分のうちに「霊的な音階」を作り出すことである。その音階の階段を昇って、私たちの霊が天の国に導かれるために」(V. I. マルトイノフ)。この「霊的な音階」こそが、聖歌の基本概念である「神使の歌声」と調和する「音階」である。

これが、聖歌が単なる楽譜に書かれている音楽記号や音楽規則の演奏に留まらない理由である。聖歌の目的は、楽譜上の調和(ハーモニー)を目指すことだけではなく、楽譜を超えて神使の歌との調和(ハーモニー)を実現することにある。

教会の祈禱に立つとき、聖歌者が常に念頭に置くべきことは、今自分の行っている聖歌が、聖歌の目的に適っているのかどうか、即ち宝座の上で見えずして主・神を讃美している神使等の歌声と調和しているのかどうかという霊的な聴覚の働きである。

(2008年度北海道ブロック聖歌研修会講義資料より)

(※V. I. マルトイノフ:1946年生まれ、ロシアの作曲家。音楽史専門。著書に「聖歌史」(1994年、モスクワ)

以上のことから「正教会聖歌における音楽性」を考える時、まず念頭に置くべきことは、聖歌の基本概念にもあるように、私たち地上の聖歌隊は、聖歌の第一人者である諸神使の讚美の歌声に倣うものであるという位置づけであろう。また、同様に重要なポイントとしてニッサの聖グリゴリイや聖金ロイオアンが教えているように、「正しい聖歌」は「正しい霊の在り方」から出てくるものであり、正しく主・神の声に呼応するためには、その声と同じ周波数で反響する霊を自分の内に調律しておかなければならない、という点を挙げるができる。更に、「誰でも聖歌を歌うことを望んで聖堂に入って来た者を拒んではならない」という聖金ロイオアンの教えを思い合わせると、正教会聖歌における音楽性とは、音叉による調律(肉体的な聴覚)よりも主・神の声に呼応できる霊の調律(霊的な聴覚)を優先するものであることは明らかであろう。マルティノフが「教会の奉神礼や規則を単なる儀式として理解し、形だけを模倣するのではなく」と言っているのは、正にこの文脈上で理解されるべき指摘である。

しかし、ここでは「二者択一」を前提としての話をしてのではなく、両方の要求を満たすことができるのであれば、なお良いのである。「恵広き主」は、一方を与えたのだから、もう一方は与えないというような主ではない。両方を賜うことができる霊を自分の内に備えれば、必ず与えられる。イアコフの書には次のように記されている。

「ただ、疑わないで信仰をもって願い求めなさい。疑う人は、風の吹くままに揺れ動く海の波に似ている。そういう人は、主から何かをいただけるもののように思うべきではない。そんな人間は、二心の者であって、そのすべての行動に安定がない」(イアコフの書1;6~8)。

また、現状に対する不平不満で一杯になった心では「祈る」ことはできないし、「祈り」にならない。「祈り」とは、主・神に指示したり、命じたりすることではない。現状に対して感謝する気持ちが在る時、初めて「祈る」ことができる。自分は自分が所属する聖歌隊を顧みて、主に感謝できるだろうか。自分が所属する聖歌隊が在ること自体、感謝すべきことではないだろうか。聖歌隊が在るということは、即ち奉神礼が在るということ、牧会してくれる神品がいるということ、機密に預かることができるということである。

聖歌に近道は無い。その王道は「祈り」である。「形だけを模倣する」ことに走るべきではない。誠実に地道に主・神の前を従順謙遜に歩いて行くことが大切である。

(資料作成:スヴェトラーナ 山崎 瞳)